

雑詠日記

徐山猿声

卷の四

一九九一年

市井一人

一九九一年も、歴史上大きな変革の年であった。わたしの雑詠記録はまだ続いている。詠んでいるものにいつこう進歩があるようにも思えない。ただ、ランボー百年忌によせて加藤周一氏が、「詩や仕事が人生のためにあるという考え、むしろ、人生と詩を含めてその全体が『自由なる自由』の自己実現であるという思想……」と述べ、「詩の作り方などではなく人生の再構築」を説いているのに励まされて、人生を高く深く探ろうとするだけだ。その過程で二三の珠玉の言葉を発見できたら、望外の幸せといえるべきだろう。

ああ百歌し、なお歌を進める

喜憂に歌無ければ、どのようにして生を尽くせるだろうか

一月五日
同窓とラーメンすする吹きさらし

オリオンが凍てつく空に古い夢

一月八日
わが犬も娘となって寒に入る

一月九日
明星を灯して黒い山眠る

一月十日
小人の閑居ならずやこの日々は湧き出る熱意傾けざれば

一月十六日
対岸の戦争まるで待つごとく情報を待つ平和日本

ぐんぐんと天衝く風の糸の張り

一月十八日
昨日、米英軍イラク猛爆撃。

冬空の航行灯をいぶかしむ遠い戦火の映像見れば

一月十九日 大寒にモデルの犬は眠りこけ

一月二十三日 ラグビーのボールを脇に抱え来た少年ふいに挨拶し行く

一月二十六日 戦火によつてペルシャ湾に石油流出。

寒々と油の海に声無き鵜戦の果ての人の姿か

一月二十七日 冬枯れて心に花のない空虚

一月二十八日 変容せよ蘭一枝は部屋にあり

一月二十九日 月出でて人の世の冬映し出す
(十五日の月)

一月三十日 照らされて多聞櫓の冬の宵

一月三十一日 連雀が上に下にと飛ぶ枯れ野

二月三日

チエニーの式部を供に一家で散歩。

竹林に己が香に酔う梅の花

鬼やらいやがて雨垂れ春の音

二月五日

暗い星にも放つ熱あり冷え込む夜

(われわれの星)

二月八日

花籠に鉢植えの花春の花

(絵画教室)

二月十日

失った時を求めて終日を読書に過ごす一日を得る

二月十一日

雨帯びる早春の山に椿得て茶事に備える妻の華やぎ

迎春の茶花に選ぶ赤い櫛

この冬は温かったせいで、まだ色鮮やかな葉をつけた櫛。

二月十五日

呉偉業という人の詩句「閑窓聴雨詩卷をひろげ」に誘われて、

暖房で曇るガラスに打つ雨を運ぶ嵐は春のざわめき

二月十七日

『失われた時を求めて4』読了。

人は皆自分の内に幻想を、美を、育んで求め続ける

晩鐘に春は名のみの低き空

朝間には霰聞いた夜猫の声

二月十九日

残冬の切れ味冴える細い月

(太陰暦一月五日、寒波襲来)

二月二十日

今年初めての遅い雪。出勤の道を変えて山里の方へ。

雪招く早良の野辺へ浮かれ行く

去る冬の名残の雪が空に舞う

夏柑の実に置く雪の白さかな

豌豆の花に寄り添う雪も花

雪中を遠く見据える鳥一羽

二月二十一日

地をすすぐ雪に轍の一続き

二月二十三日

今日も雪。再びカメラをかかえて室見川、飯盛山あたりを散策。

今日だけは白い飯盛雪の山

立ち尽くす雪の中洲は鳥の宿

「莫説光陰去不還 少年情景在詩篇 …」（清の袁枚）。残念ながらわたしには、若いときの情景を宛然と思ひ起こさせる詩篇が無い。今詠んでい

る句や歌にそれだけの力があるか。

二月二十四日

雪残る寒い夕べに戦争の激化聞きつつ椿を描く

二月二十六日

青垣に白い雪置き冬が去る

「平仄を知らざる者の早春賦」

春夜 清月 瓦上の雪

光芒 遥かに越ゆ 無量の闇

残寒情有り 草木を驚かし

花開いて人を招く故里の間

青き灯が草目覚めよと清月夜

二月二十七日

一筋の飛行機雲はまっしぐらまぶしい春の朝日に向かう

三月三日

鷗鳥春の乱舞に余念なし

三月四日

試験の監督をしながら昨夜寝入る前に句を考えていたことを思い出したが、どうも記憶が定かでない。あれはほとんど夢の中でそう思っただけなのだろう。いや、何かすてきな句ができていたのではない。昨日の情景・心象風景を想い起こそうと努めてみた。やっと思い出したのは、オートバイのエンジン音を高く何度も響かせるのが少し離れた坂の方で聞こえたことだった。手繰り寄せられた句は平凡なものだった。

暴走の音する若き春の夜

三月六日

剃刀を当てた頬撫で春の風

岩波文庫『中国名詩選』を読み終わった。

三月八日

糠雨と巡り来た春ちりばめて空に震える櫓の梢

三月十日

昨日、伯母の、また学生の父の訃報を聞き、まず***まで電車で出かけ、その後***から車で帰省。

麦畑はただ青々と春陽照る

関門橋かもめと春の空渡る

夕方、母と叔母の三人で桜と白萩の苗木をわが家の墓のそばに植えに行く。叔母がよく気がついたと言うから、自分が入った時のためと答える。「願わくば花の下にて春死なんその如月の望月のころ」の西行の心持ちになりたいもの。

三月十一日

一片の手向けの黄菊余寒する

三月十二日

一株の菜の花の下草そよぐ

三月十六日

また宿直。夕方から『失われた時を求めて』を読み始める。プルーストに感化されると、時間が豊かなものになって何気ない身の回りの出来事に感覚が敏感になる。

この管理室は西に細長い窓が五つあいていて、天気の良い日には昼下がりから日が射し込んで床のカーペットの上に四角い日溜まりを並べる。日が傾くにつ

三月十七日

れてその明るい長方形に切りとられた部分がわずかに南にずれながら東に移動して、ついには反対側の壁を這い上がっていく。こちらの壁にはいろいろのものが作りつけてあるから明るい影はさまざまの形をとって踊りだす。日がすっかり傾いて山の端に來ると、春分に近い今ごろは南側の白い壁をスクリーンにして光の通る道筋を広い帯状に示す。光線は壁を撫でるようにわずかの傾きで斜めに走る。時計の下その明暗が急に薄くなったので、窓越しに光を放つものの方を見ると西陵に没し始めたのである。見つめている間に光の塊はすると峰の背後に姿を消した。

春の陽がもの言い残し沈み行く

ブルーストが綿々と叙情的に語ることがらは人生そのものかもしれない。感官や情知を活動的に働かせることは、われわれが日々の生活で見たり聞いたり感じたりしていることを、本当に見たり聞いたり感じたり考えたりする事だ。それによつて時が充実し、ありふれた生活が価値を持つてくる。今日という日を、ブルーストのリズムが刻む。

陽に浸るそらまめの花酔い心地

影伸びて時計の音に春日過ぎ

陽に溶けて西陵淡く空画す 陽に湯浴みしつ稜線たどる

三月十九日

田起こしに半眼の月目を醒ます

咲く木瓜と春の焚火に惑い追う

三月二十四日

京都にいる。鹿苑寺金閣。

耀きのはずれに椿 銀河泉

三月三十日

枝に刺す蜜柑実はなし菜種梅雨

両の手でつぼみ捧げるチューリップ

三月三十一日

振り袖の行き交う春のはなやぎを文庫小脇に佇んで見る

四月一日

ヴァレリーのあのめくるめく問いかけは静謐求め天界めぐる
花冷えや鴬につらい町の川

三好達治著『詩を読む人のために』を読み始める。やっぱり、本物の詩人
たちには歯がたたない。

四月四日

陽光のエナジー充ちた花つぼみ

トラクターと春を耕す蝶の声

(エイホ エイホ ソレ ソレ ソレ ソレ)

四月五日

春雨が萌黄に染める樹と人と

四月八日

このあいだ買った新しい花瓶に花を生ける。入学式の日。

新しい花器に初心を挿し入れる

四月十日

しづく落ちて花の震えが遠く飛ぶ

花遠く若草の田に驚一羽

学生が大学をやめると言い出した。

「花歳々」

雨は 桜を濡らして降っています

若者が敗北を喫して

退却を決心しました

敗北を認めることは誰にもできることでしょうか

退却はいちばんたやすい道でしょうか

すでに挫折を経験したことのある若者の

こんどの決断は 少しは成功しないのでしょうか

花に問えば答えてくれるでしょうか

桜を散らして 雨が降っています

降られても花見ぬ酒に酔う人は心の憂さにも馴れた人

四月十一日

春雨や不熟のみかん色古りぬ

菓子ふたつ食らう多事の日新学期

靴音のゆかしい春の雨の夜

四月十二日

唐津散策。舞鶴城、虹の松原。

鶴舞つて桜は虹に落ちかかる

石垣の下の山吹構図とる

浜に焚く火に繰り言を寄せる波よ

かすむ遙かの海の想いよ

会うたびにおまえの顔は違つて見える

その顔に心を読みとろうとするからか

それとも わたしの心がふるえながら見つめるせいかな

四月十三日

繰り返し寄す波音を聴きながら法界定印大きく結ぶ

(座禪)

廃船の黒い影打つ春の雨

青い池に淡彩で描く山桜

四月十五日

もっこりと若葉生まれる山を見よ

四月十七日

風泣けば舞うひとひらの花を追い蝶は漂泊風の波間に

鳴る風は春の高ぶり地の吐息

四月十九日

新緑に勝るものなし春の今

四月二十日

筥掘りに招いてくれた家は山の斜面の一軒家。

海棠も筥を嗅ぐ一軒家

四月二十二日

瓶に挿すアザミの刺は野を慕う

四月二十五日

朝霧に藤なまめかし 微熱して見る

四月二十六日

スニーカー軽やかに行く人春ただ中

五月三日

森かげに矢車光る五月かな

五月四日

岡の辺に母と二人で腰下ろし若葉のかなた海を見つめる

山藤の連なりの下枇杷の実の揺籃白く風にまどろむ

新緑の鎮守の杜の上に海

五月五日

ならび立つ五月のポプラコーラス団

五月八日

じゃがいもの花咲く時はもの思い

五月十三日

陽が放つ麦の穂の矢は乱れ立つ

五月十四日

春送り剪定をする妻の乗るはしご支えるものぐさ亭主

五月十五日

思い出話をしたら、娘に「歳だねー、そんな話をして」と言われた。茫々たる時・・・。

卯の花は時の境の寓意なす

(空木の花)

五月十八日

きらびなる衣裳揺らせて脂粉の香匂う蛾ひとりガラス戸歩く

五月二十日

からたちの花散るころの雨なつかし

薔薇濡れて紅深く淵の底

五月二十四日

葉群照る初夏の夕べの宮の杜

五月二十六日

ジャン・ルノワール監督の映画「黄金の馬車」を見に行く。映画は、深紅

の幕が開いて人生の舞台として展開される。人生は劇中劇の役を演ずるようには運ばない……と嘆くそのヒロインの人生もまた最初に開いた幕の中の舞台での出来事。その人生で己の役に踏み込んでみれば、なにがしかの事はできるかもしれない。

バラ一輪ダウンタウンの柵守る

すいれんと波紋を並べ走り梅雨

走り梅雨よ桑の実はまだ未熟なり

デパートで雨宿りする顔を見て「黄金の馬車」観終わり帰る

バスの中ベル押す時を焦がれ待つ子の母親のかがやく笑い

燕が飛翔の技量誇ることかすめる水にバラの幻

五月二十九日

湿った重い空気が

この九州の地をおおい尽くして

十五になったはずの相手の月を隠す夜

水を張って大海となった田の中で

蛙の合唱団がわいわい世界を論じている

六月五日

ホームステイで来ているアメリカの中国系女子学生と螢見物。

夏草に流れる露と螢の火

一筋の光にいのち焦がすもの

六月十二日

しくじりに苛立つ汗は夏の風邪

六月十三日

花熟れて光陰を去る時計草

六月十九日

コンクリート切る音溶ける梅雨の空

珊瑚樹にはさみを入れる雨合羽

六月二十日

雨音に木魚が歌う梅雨の朝

(近所から聞こえる)

雨が打つ額あじさいの色かたち花の意匠は人を引き込む

六月二十二日

夏至の風にたんぽぽの綿まん丸く

六月二十五日

雨だれは時の流れを計る声

六月二十八日

夕立に数歩で大雨受ける肩

七月二日

襄王の歩みを止めて霧昇る

七月十一日

朝雲に溶けゆく夏の白鷺にこの身を変えて空高く飛べ

七月十二日

夕映えがためらいがちに戯れる梅雨まだ明けぬ銀杏の葉群

七月十五日

飯盛の頂ひとつ雨の上

七月十九日

梅雨明けは白い木槿の垣の上

七月二十日

とんぼうが早や灼熱に討ち死にす

雲湧いて山の深みの増す真夏

七月二十二日

傾いた日にかがやいて黄金なす波間に眠る天の鳥舟

七月二十七日

遠雷を寝不足の眼を閉じて聞く真夏の朝に今日を目論み

怠惰撃ち天から啓示稲光

七月二十八日

日曜日。本を読んだり、昼寝をしたり。『神曲』地獄変読了。

花火鳴り蝉がおどろく宵木立

玉響に開く花火のきらめきを暗い部屋からはるかに望む

八月三日

夕立を呼んで花飛ぶ石の段

八月四日

緑陰に蟬の静まる永い時

夕立が通り過ぎれば蜘蛛動く

八月七日

対馬へキャンプに出発。総勢八人。今年は天気が心配。

白煙のたなびく志賀を後にして見渡す限り玄い海行く

八月八日

物憂さもあり 野営地で聞く甲子園

ひぐらしと崖を見上げて日を暮らす

波碎く巖の黙す深いしわ

八月九日

昨晚から雨まじりの風が吹き出し、テントは大揺れに揺れて、石ころの上に段ボールを敷いた床は寝心地が悪いし、さらに夜明け前からは雨が染み込んでくるようになって、さんざんのめにあった。民宿の親子が迎えに来てくれて、撤退する。民宿に落ち着いてから、小生だけ先に帰る。

船中の人語 杜詩を消し

児女の笑声 仮眠を妨ぐ

知る 甫の長江の興に及び難しを

彼の山影の下 家津在り

八月十日、帰省。八月十七日、帰福。この間無為。

藪と蚊に悪戦しての墓掃除

八月十九日

寸ほどの蜥蜴の走る冷える夏

八月二十三日

残されて矢車回る野分け後

F M ラジオで、母が亡くなったとき夫である父が葬送の曲としたという人のリクエストのワルツが流れていた。

葬送にこのワルツかけた夫ありと伝えるラジオしみじみと聴く

八月二十四日

火の滝の降る地見おろす盆の月

(正しく十五夜の盂蘭盆会)

八月二十八日

事も無い夏の終わりに秋風の気配探りつコンチェルト聴く

珊瑚樹に霧雨避けて秋の蝶

八月二十九日

木魚を消すほどに虫が鳴き夜が更ける

八月三十日

月の下無双の花の生と死と

(月下美人が三つ咲いた)

九月一日

鉢植えの秋蘭を描く。優美さが出せない。

ひそやかな秋蘭の花 遅暮の筆

九月三日

紅白の萩心にも咲き初める

九月四日

満ち足りたカラス家路につく夕べ

九月九日

虫の音は静まる星へ長き旅

九月十二日

武蔵野にこおろぎ高く名乗り出る

九月十五日

くたびれて人の顔見る美術館

(銀杏を踏めば上野にカラス鳴く)

九月十八日

西日が射る煩惱具足の秋の蝶

小蝶が灯火親しむ和讃集

『親鸞和讃集』を読んでいたら、昼間迷い込んだのだろうか緑がかった小さな蝶が机上にやってきた。

九月十九日

燃える身で部屋を朱に染める曼珠沙華

月ほどの薄雲一つ月よぎる夜気はひたすら秋を湛える

九月二十一日

月光に白萩生を延べにけり

秋更けて目覚める夜半の障子窓月の光が清らに映る

九月二十二日

仲秋の田園を訪ねて風景画を描いてみる。

峠道抜けてまた里彼岸花

溪流の音にすすきは波を打つ

釣竿は動かずすすき揺れる湖

筆洗に蜂が溺れる秋日和

写生する人と並んで蝶座る

描きとる景色に入る秋アカネ

野に座してとけ込む人に虫集う

九月二十五日

これもまた一つの私見情こめて執着すれば道を失う

この道も縈たる時に潰え去る晶質結ぶことを求めよ

九月二十七日

野分け去り夜を静める雨の音

十月一日

時を追ひ自らの場所探す秋

十月二日

赤光にわが影追つて就く家路

(自転車)

どの家も赤くほてるよよい日暮れ

コウモリは赤い闇見て飛翔する

十月六日

大学時代に所属した部の三十周年記念誌に四百字余りの一文をよせる。昔
合宿をした寺の鐘の音を、今朝も早すぎた目覚めの床で聞いた云々。

青春は響きのかなた秋の鐘

十月七日

コスモスにすすき乱れる一字あり

十月八日

カーブミラー秋の夕焼け納め取る

十月十一日

秋風に翻弄されてなお強くコスモスの群れのびやかに立つ

十月十三日

岩波文庫『源氏物語』を読み始める。

秋の田に風吹きまさりしみじみとも思わせるいにしえの歌

十月十九日

十四日からホームステイ中のフランスの女子学生を阿蘇に連れて行く。二十三歳、名はヴァレリー。帰途友人宅に寄る。夫人はフランス語を話すスイス人。

これはまた無心の大地阿蘇火口

米塚に草刈る音を積み重ね

かるがると光と遊ぶすすきの穂

夕べの陽射し込む居間に入りまじる仏語のひびきそぞろ漂う

十月二十二日

池の柵同じく丸い十三夜

十月二十五日

この雉を見つめ尽くせばいつの日か共に林に遊ぶ日は来る？

十月二十八日

石路のまず色めいて秋更ける

ようように水色めいて紅葉の賀

杜詩

嗚呼 六歌ス歌思ハ遅シ

溪壑

我が為ニ春姿ヲ廻ラセ

十月三十日

花運ぶ人夜目に見る秋の宵

嗚呼 百歌す猶歌を進む 喜憂に歌無くば何ぞ生を尽くせん

十一月三日

立ち並ぶクレーン達と戯れる秋の鴟のゆるやかな舞

紅葉を薄墨で画く遠い山

雲降りて紅葉狩りする飛行船

秋空に手足ひろげるグライダー

切り通し曲がれば去年見た紅葉

黄な蝶が落ち葉と落ちる山之路

今年逝った巨匠の弾いたピアノ曲にわかに胸にさざ波立てる

義隆が眠る古刹の朱の橋と競う紅葉の色ことさらに

コーヒーが効いて熟睡できない。

ふと迷い亡き父偲ぶ三回忌ひかえて遺産一つ手放す

十一月四日

満ち足りて光るすすきのさんざめき

秋日には秋に似合いの至福の日

ささやかな人の営み秋日暮れ

十一月八日

雨上がリツワの葉が照る秋しじま

十一月九日

首伸ばす雁飛ぶ野辺に晚い秋

十一月十一日

冬立って柿の実重い露の朝

十一月十五日

フランスからの客は今日引つ越し。

ひと時を無心に過ごし筆洗に人とわたしの愚かさ洗う

いばりして見る冬の星ちぢこまる

十一月十七日
山の池に映る柿の実つつく鷺

レンズ越し覗く紅葉の美のプラン

十一月十九日
身を細め桜紅葉のただ一葉

十一月二十日
月明に紅葉失う桜の木

十一月二十一日
石段にわが影映す冬の月強く静かに物皆照らす

十一月三十日
小春日や日向ぼこするカラスウリ

十二月三日
つぶやきは梢の枯れ葉並木道

十二月四日 冬の朝急ぎの用の二羽の鴨

十二月九日 三日月の身も細るほど冷える宵

凝る肩に背負い家路へ月の鎌

十二月十一日 時雨が打つコスモス 暗い空の内

十二月十四日 冬の磯に動かず並ぶ海鵜達

十二月十五日 暮れなずむ残照山を影絵とす

十二月二十日 月飾る樅の頂き年の暮れ

幻想を売る店の上冬の月

十二月二十二日 ベートーベン「交響曲第九番」を聴きに行く。

相乗りの若い男女の自転車が暮れの喧噪運んで来ます

まだ残るベートーベンの曲想に変奏かなで磯に寄す波

新開地暮れの夕日の大いなる

冬の田で宙返り打つ風の子等

一年を煙でいぶす焚火かな

十二月二十三日

父の見舞いにたびたび来てくれた人を見舞う。

見舞い来て言葉にならずただつらく見守るだけの老いというもの

十二月二十八日

雪の降る中を帰省。ヘロドトス『歴史』を読み終わる。私の歴史も、こうして積もっていく。

背振嶺にオロシヤの便り風と雪

雪しぐれ行く年せかすしめ飾り

夕陽に乗って雪舞う鎮守杜

一九九二年正月
徐山亭 謹製

「檳榔樹」

P. ヴアレリー

檳榔樹、そのささめきは黄金なす軽き響きよ、
行きずりの風の小指にふとなれば
たちまちに砂漠の魂
やはらかき絹の鎧に被はれつ
一陣の砂塵を捲きて吹き当つる熱風に
檳榔樹むくゆるは
ただ一つ不死の声のみ、
声のまた自からの神託たるの効あるに
檳榔樹、こころは足りつ
悲哀も歌となりゆく不可思議に。

空しとも、はた世にとりて失はれたりとも、

汝が考ふるこれ等歳月に

貪婪なる根のそなはりて

砂漠の地下深く食ひ入るを知らざるや。

闇黒に選ばれし

毛根あるこの物体は

地球の革新ふるるまで

つひにとどまらず

梢の求むる深所の水を

追ひ求めやまざるなり。